



法学部図書室

明治32年9月、京都帝国大学法科大学開設、爾来約70年の歴史は現在の講座数33、創設以来の資料の蓄積は、32万冊余を数えるに至った。その蔵書構成は、法律・政治学の全分野にわたって、その資料的価値は屈指のものといわれてきた。しかも同時に次の二つの大きな特色を図書室に残してきた。

その第1は、書庫設計に当って、現在では常識となっている積層方式をすでに大正年間に採用したことである。今でも学内の多くの図書室ではしごを使用している不便さを見るにつけ、これは当時としてはすばらしい着想であった。第2は図書目録の分野である。研究者と増加してゆくぼう大な資料の接点を図書目録の充実に向け研究者の利便を考えた。大正2年から昭和10年にわたって刊行された *Katalog der Fremdsprachigen Bücher in der Bibliothek der Juristischen Fakultät und der Wirtschaftswissenschaftlichen Fakultät der Kaiserlichen Universität zu Kyoto* はさん然と輝いている。その遺産に対していくたの利用者から今でも賛辞を惜しまれていないのである。一方、蔵書目録作成をてがけてきた図書館員の中から著名な目録学者が輩出した。

以上のような伝統をうけついできた図書室も現在の時点にたてば次のような問題が

ある。

はじめに、書庫の管理と運営である。関係者の異常な努力の結果にもかかわらず、書庫の満腹状態から脱却しきることができなかった。やむをえずうたれてきた手は、管理する人員の伴なわない資料の分散であり、すでに約10ヶ所にもおよんでいるのである。この事実をいかに解決してゆくか。

地階書庫、ここには約20万冊の図書が収蔵されているが、資料の保存のためには最悪の条件が揃っている。窓は錆ついて開かず、冬は冷えきっていて、その反対に夏はむれて、しばらく入っていると気分が悪くなりそうである。せめて除湿器でもという声が最近でできたのがせめてもの救いの道である。歴代の図書館員の、研究者のための利用し易い快適な書庫建設への願望のむなしい声が地下道の奥から聞こえてくるようである。

研究図書館として、教官の教授・研究活動への奉仕を根底として、その一つに新着洋書雑誌の一部にコンテンツ・シート・サーヴィスを昨年開始した。現人員（定員11名、非常勤2名）では、十分なサーヴィスを行ない難いが、今後、参考業務を研究者の期待にこたえてどのような展望をもって進めてゆくかが大きな課題である。学部学生に対しては、まず学部独自の学生閲覧室をもつべきこと、これも大きな問題点である。

大学の使命、教育と研究の場を支える土台の一つは図書館の充実である。今、もしその新築が考えられるならば、部局図書室の使命の上になんて、資料の良好な管理を基礎にした、研究者への奉仕形態をさまざまな角度から考えねばならないのではないだろうか。

あ と が き

- ▶ 読書週間にこの号をお届けできることを、大変うれしく思います。
 - ▶ 秋になると例年のことながら、図書館の利用者が大幅に増え、私達も日々の仕事に張り合いを覚える今日この頃です。
- 今回は学生の寄稿を休み、各学部図書室の方々の卒直な発言をいただき、誌上討論を試みました。ご意見、ご感想をお寄せ下されば幸いです。

古 記 録 展

と き 10月26日～28日

ところ 附属図書館陳列室

万里小路時房自筆の「建内記」等、
菊亭家寄託の古記録、およびその他の
古記録類を陳列。